

風と木 からすときつね

小川未明

青空文庫

風と木

ひろのほら 広い野原は、雪におおわれていました。無情な風が、わが世顔に、朝から夜まで、野原の上を吹きつづけています。その寒い風にさまたげられて、木の枝は、すこしもじつとしておちついていいることができません。しきりに振り起こされては、氷のような空気の中に無理やりに躍らなければなりませんでした。

「もし、もし、北風さん、そう私をいじめるものではありません。私は、いま、春になる前の用意をしているのです。あなたが、この野原をひとりよがりには駈けまわっていないさるのも、わずかな間です。北の遠い地平線のあちらへ、あなたは、やがて帰っていく身ではありませんか。そう、私をいじめるものではありませんよ。」と、木の枝は、風に向かって叫んだのです。

北風は、これを聞くと、からからと笑いました。

「春になれば、私は、それは北の遠くへ帰つてしまうのさ。そして、こんどは、南からやさしい風が吹いてきて、おまえさんたちの頭を軽く、しんせつになでてくれるよ。けれど、あちらの池にきている雁が頼んで、いうのには、どうかもうすこし、元氣よく吹いていて

くれ、あんなほおじろとか、うぐいすとかいうような、人間のもちやにされるような、めめ々々しい、虚栄心の強い小鳥どもが、いばり出すのは、しゃくだというのだ……。」「と、きたかぜ 北風は、木の枝に答えたのでした。

木の枝は、北風が力んだので、二、三べんも、細い身を揺すらなければならなかった。ひろののほら 広い野原の上には、雲切れがして、青い鏡のような空が見えていました。木の枝は、それを見ると、無上になつかしかったのです。春になれば、毎日のように、ああした空が見られると思つたからです。そして、かわいらしい小鳥どもが、自分を慕つてやつてくる。中にも愛嬌もののうぐいすは、どこからか、すばしこそうな、あめ色の翼を、朝の日に輝かせて、早くから飛んできて、

「おかげさまで、春がきました。あなたのいい香いは、野原の上をいっぱい漂つています。ごらんさない。空の太陽までが、うつとりとしてあなたに見とれているではありませんか。なんという、あなたはいい香いのする花でしょう。もしあなたが、この野原に咲かなかつたら、この広い野原は、どんなにさびしいでしょうか。私ばかりではありません。ほかの小鳥たちも、この野原には、影をひそめて、いつまでもここは、冬のまの景色でいるにちがいないのです……。」「

木の枝は、こういったうぐいすの言葉を思い出して、

「なに、私は、寒くたって、かまわないけれど、小さな鳥たちが冬に飽きています。私が、花を咲かせないうちは、こまどりも、うぐいすも、おしののように、どこかのやぶの中にくんでいなければなりません。それを思うと、早く、花を咲きたいばかりに、ついあなたにも訴えたわけでした。」と、木の枝は、風に向かっていいました。

すると、北風は、さげすむように、ふたたびからからと笑いました。

「ほんとうに、うぐいすがそんなことをいった？」

木の枝は、なつかしように、

「愛嬌もののうぐいすは、ほかの鳥とちがつて、美しいばかりでなく、心もやさしく、私には、しんせつなのです。」と、答えました。

北風は、かつて、雪を家来にして、野原を駆けていた時分、一本の棒の上に、うぐいすがとまっついていて、北風を見て、さも感歎しながら、

「北風さん、なんというお勇ましいんでしょう。数限りない雪の家来がおりなさるほかに、あの大きな雁や、野がもまでが、みんなあなたの家来なのです。やがて、あなたが、北の故郷へ引き上げなさるときには、この雪も、野がもも、雁もあなたのお伴をし

て、いっしょにいつてしまうのでしょうか。ただ、不幸なことに、あなたには、私のような、かわいらしい唄うたいが同伴にいないことです。私は、あなたが去られると、この野原の女王になります。そして、私が、一声かけさえすれば、あのおじいさんのような、無骨な枯れ木までが花を咲くのですよ……。」といったことを、北風は思い出した。それで、北風は、木の枝をさげすむように笑ったのでした。そして、北風は、うぐいすのいったことを、木の枝に語ったのです。

木の枝は、うぐいすが、だれに対しても、いいかげんなことをいうので、びつくりしました。

「そんなことをいいましたか？ 私をおじいさんのような無骨者だと……、そして、自分を、野原の女王だと……。」

木の枝は、そんなら、自分は、じつと寒い風をも我慢をして、いつまでも花を咲かずにおいてやろうと思いました。そうしたら、どんなにこの野原は寂しいかしれない。いつまでたつたつて、春がこないにちがいない。そうしたら、うそつきのうぐいすはどうするつもりだろう……。

「北風さん、私は、我慢をします。どうぞ、もつともつと強く吹いて、雪を盛んに降ら

してください。」といいました。

北風^{きたかぜ}は、それから、しきりに募^つりはじめました。

からすときつね

からすが、どこから飛^とんできて、この木の枝^{えだ}に止^とまって、まっ白^{しろ}に、雪^{ゆき}のつもった、野原^{のほら}をながめていました。

「なにをそんなに考^{かんが}えているのですか？」と、ふいに、声^{こえ}をかけたものがあります。からすは、振^ふり向^むくと、そこに一ぴきのきつねが雪^{ゆき}の上^{うえ}にうずくまって、木^きの上^{うえ}を見^みていました。

「きつねさんですか。私^{わたし}が、去年^{きょねん}の秋^{あき}、ここへやってきたときに、だれか犬^{いぬ}を捨^すてたものがあつた。犬^{いぬ}は、クンクン悲^{かな}しそうな声^{こえ}を出^だして鳴^ないていました。すると遊^{あそ}びに、野原^{のほら}へやってきた子供^{こども}たちが見^みつけて、犬^{いぬ}のために、小^{ちい}さな眠^{ねむ}る場^{ばしょ}所^{ところ}を造^{つく}ってやって、家^{うち}へ連^つれていったら、しかられるから、みんなが食^たべ物^{もの}を持^もってきて犬^{いぬ}にやろうということなどを相^{そう}談^{だん}していたのを見^みましたが、いま、その子供^{こども}たちの造^{つく}った小^こ屋^やが雪^{ゆき}の下^{した}になつてしまつたと思^{おも}つていたのですよ。」と、からすはいいました。

きつねは、不思議なことを聞くものだと思った。その小屋などは、なんでもないことだが、捨てられた犬は、どうなつたろうと思つたのです。きつと、雪の下になつて、死んでしまつたにちがいない。だが、そんな捨てたような犬を連れていつて飼つておくものがあるう？ ……きつねは、犬を自分たちの敵と思つているので、平生心から犬を憎んでいました。それで犬に対して、好意のある考えが浮かんでこなかつたのです。「きつと、その犬は、雪の下になつて、死んでいますでしょう。」と、きつねはいいました。

すると、からすは、きつねのいつたことを聞きとがめて、

「死んで？ いえ、その犬は、とうとうその子供の中の一人が、家へつれていつてかわいがつて飼つています。先だつて村へいつたとき、その犬が楽しそうに遊んでいるのを見ました……。」

「物好きな人間もあるものですね……。」と、きつねは、いつた。

「私は、犬のことを考えていたのではありません。子供たちが造つた小屋は、どうなつたろうと思つていたのです。」

「小屋なら、雪が消えたら、出てきますよ。」

「いいえ、雪が消えたら、あの小屋は、流れてしまつて、川か、海へいつてしまふでしょ

う……。」

「からずさん、そんな気づかいはありません。それは、不思議なものです。そっくり、そのまま地の上に残っていますよ。」

きつねは、自分たちが、秋から、冬になるまでの間、畑のつみわらの中に眠っていたことがあり、やがて、雪が降ってそのわらを埋めると崖の穴に移り、来年雪が消えた時分に、元のわらのあたりへいつてみると、わらはそのままになっていることを知ったからです。

「この雪が解けて、どんなに大水が出るかということ、あなたは知らないからです。」と、からずはいって信じなかった。

春になって、北風が、いつしか南から吹く風になると、雪はどんどん消えていった。そして、からずのいうように、川という川が、水でいっぱいにあふれるのです。しかし、その水は方々から、ほとんど、気づかないほど、静かに、ゆるやかに、雪が解けるままに流れて、集まってきたもので、けっして、畑にあるつみわらや、また野中のどんな小さな板くずをも流すものではなかったのです。それをなぜ、からすが、そういったかというのに、からずは、いつか秋の末に、どこからか蒸した芋を拾ってきて、穴を掘って埋めて

おいた。そのうちに雪^{ゆき}が降^ふってしまつて、掘^ほり出^だすひまがなかつたのでした。そして、雪^{ゆき}が消^きえて、そこへいつてみたときは、なんにも残^{のこ}つていなかった。からすは、芋^{いも}が水^{みず}のために、流^{なが}れてしまったと思^{おも}つたのです。もぐらが、冬^{ふゆ}の間に、それを食^たべてしまったことを知^しらなかつたからです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

初出：「赤い鳥」

1927（昭和2）年4月

※表題は底本では、「風《かぜ》と木《き》」からすときつね」となっています。

※初出時の表題は「風と木、鴉と狐」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年5月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

風と木 からすときつね

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>